

ユイスマンス研究

—《さかしま》論 (II) —

岩 渕 邦 子

Kuniko IWABUCHI

(外国語教室)

20年後に書かれた序文

ユイスマンスが1884年に発表した《さかしま》とは一体どんな作品であるのか。今日それは、「19世紀末のデカダンスのバイブル」という評価を得て仏文学史上、不動の位置を獲得しているのであるが…

本稿では、《さかしま》が作者ユイスマンス自身にとって何であったのか、という視点から検討したい。この時、依拠すべき肝要なテキストは《さかしま》発表の20年後に書かれた序文以外にはないであろう。(→PRÉFACE ÉCRITE VINGT ANS APRÈS LE ROMAN¹⁾)その冒頭の一節は以下のようなものである²⁾。

Je pense que tous les gens de lettres sont comme moi, que jamais ils ne relisent leurs œuvres lorsqu'elles ont paru. Rien n'est, en effet, plus désenchantant, plus pénible, que de regarder, après des années, ses phrases. Elles se sont en quelque sorte décantées et déposent au fond du livre ; et, la plupart du temps, les volumes ne sont pas ainsi que les vins qui s'améliorent en vieillissant ; une fois dépouillés par l'âge, les chapitres s'éventent et leur bouquet s'étirole.

J'ai eu cette impression pour certains flacons rangés dans le casier d'A *Rebours*, alors que j'ai dû les déboucher.

ここには自作をふりかえって見たがらぬ意外な作家の心情が明かされていて興味深いのであるが、作品に関する全てをワインの比喩で語っている点がいかにも国柄を表わしていて面白い。とりわけ、《…flacons rangés dans le casier d'A *Rebours*》という箇所は、《さかしま》の本質を端的にイメージ化するものであり、単なる比喩以上の効果をあげている。すなわちそれは《さかしま》全体が一つの大きな整理棚であり、そこにユイスマンスが丹精して仕込んだワインがぎっしり並べられている情景を彷彿とさせる。ワインとはさしずめユイスマンスがそれまで美術、文学にたずさわってくる中で蓄積してきた知識、見解の全てということになる。

上記イメージが語るように、《さかしま》の本質は「何か面白い話を作ること」にはなく、むしろ美術批評、文学創作に従事してきたユイスマンス自身の過去をふりかえり、そこで得た全てのものを洗い出し、全てを整理づけることにあったのだと思われる。

《さかしま》は冒頭の略述の章を含めて17の章で構成されており、各章は独自のテーマのもとになされた個別研究の様相を呈している。そして互いに独立性の強い各章をつなぐ

ものは、フォントネエ・オ・ローズの館における隠遁生活にドクター・ストップが掛けられるまで進行してゆくデ・ゼッサントの肉体の衰弱過程の描写であり、それが17の互いに異質な各章を一つの作品にまとめ上げ、辛うじて小説としての体裁を保たせ得ているのである。

このように《さかしま》はいわばユイスマンスの美術的、文学的営為の総括と整理の書であるといえよう。では何故彼は1884年前後にそれまでの美術的、文学的営為の総括と整理に迫られたのであろうか。答ははっきりしている。ゾラ流の自然主義文学についていけなくなったからである。

20年後に書かれた《さかしま》の序文には、ゾラー人を例外として、自然主義文学理論ではその先何人もやってゆけなくなった事情がこと細かに述べられている。次の一節はよく引用される有名な箇所である³⁾。

On était alors en plein naturalisme ; mais cette école, qui devait rendre l'inoubliable service de situer des personnages réels dans des milieux exacts, était condamnée à se rabâcher, en piétinant sur place.

Elle n'admettait guère, en théorie du moins, l'exception ; elle se confinait donc dans la peinture de l'existence commune, s'efforçait, sous prétexte de faire vivant, de créer des êtres qui fussent aussi semblables que possible à la bonne moyenne des gens. Cet idéal s'était, en son genre, réalisé dans un chef-d'œuvre qui a été beaucoup plus que *L'Assommoir* le parangon du naturalisme, *l'Éducation sentimentale* de Gustave Flaubert ; ce roman était, pour nous tous, <des Soirées de Médan>, une véritable bible ; mais il ne comportait que peu de moutures. Il était parachevé, irremarquable pour Flaubert même ; nous en étions donc, tous, réduits, en ce temps-là, à louvoyer, à rôder par des voies plus ou moins explorées, tout autour.

このように《さかしま》の序文は、前述した前書き的部分を終えると早速、過去に苦しい拘束として作用した自然主義文学理論の問題に入ってゆくのである。それは冷静にふりかえってみれば多くの問題点をかかえた文学理論であったのだが、メダンに集まった若手作家達、とりわけユイスマンスはそれによってさんざんふりまわされたのであった。

Les Soirées de Médan に結集した面々——Alexis, Céard, Hennique, Huysmans, Maupassant——は全員、当初は《居酒屋》という傑作を生み出したゾラの力量に敬服して自発的に集まった人々であった。ユイスマンス自身も《エミール・ゾラと居酒屋》⁴⁾を書いてゾラをほめそやしていた。

実際、1877年発刊の《居酒屋》の成功は空前のものだったらしく、それは早速エドモン・ド・ゴンクールに嫉妬心を刺激し、ために普仏戦争終了後以来続き、ドーデやツルゲーネフも常連として参加していたフロペール主催の日曜会の友好的な雰囲気がすっかりおなくなり、日曜会そのものも行われなくなってしまったという⁵⁾。

《居酒屋》の成功によって経済的にも潤ったゾラはパリ近郊のメダンに屋敷を建て、そこに慕い寄ってきた若手作家達を呼んで会食したり文学談義に耽ったりした。こうしてゾラは自ずと新たな文学グループの主催者格におさまったのであった。

確かに出発点においてはメダンに結集した面々には共通した理想があった。それは美術界における印象派のように、すなわち新しい時代にふさわしい新しい文学を生み出す

ことであった。しかし、理想と創作の実際の開きは大きかったのである。

それはとりわけゾラとユイスマンスでいえば、理工科系人間と文科系人間の感性の違いといったものに帰結する。すなわちバカロレアに失敗したため断念したものの、本来ゾラは理工科大学への進学を志望していた人物であり、科学に強い興味と関心を抱いていた。ゆえに当時の科学の進歩とその成果を素直に喜んだ。そして科学に立脚した文学を構想した。とりわけダーウィンの進化論やベルトロの生理学は文学的ヒントに富んでいると思われた。又、フランス合理主義の流れを汲むテヌ等の実証主義哲学に何の異和感も持たないどころか、その熱烈な支持者であった。その上アシェット書店の宣伝部長の経歴もあり、ジャーナリストとしてもキャリアを積んでいたため政治・社会の面にも十分な見識を有していた。こうしたゾラであったればこそバルザックの《人間喜劇》に匹敵する大作品群を夢見ることができ、実際ルーゴン・マッカール叢書の構想をうちたてた。それは豊かな作品世界を擁しライフ・ワークとして取り組むにふさわしいものであった。ゾラは、中央市場、鉄道、百貨店、炭鉱等、その時代ならではの象徴的な場を取りあげ、そこに必ず男女の愛欲の世界をからませ読者大衆の熱狂的なまでの支持を得るに至る。

ユイスマンスはゾラの力量に脱帽してしかし皮肉たっぷりに次のように言う⁶⁾。

Zola, qui était un beau décorateur de théâtre, s'en tirait en brossant des toiles plus ou moins précises ; il suggérait très bien l'illusion du mouvement et de la vie ; ses héros étaient dénués d'âme, régis tout bonnement par des impulsions et des instincts, ce qui simplifiait le travail de l'analyse. Ils remuaient, accomplissaient quelques actes sommaires, peuplaient d'assez franches silhouettes des décors qui devenaient les personnages principaux de ses drames. Il célébrait de la sorte les halles, les magasins de nouveautés, les chemins de fer, les mines, et les êtres humains égarés dans ces milieux n'y jouaient plus que le rôle d'utilités et de figurants ; mais Zola était Zola, c'est-à-dire un artiste un peu massif, mais doué de puissants poumons et de gros poings.

理工科系で科学好きとのゾラに対しユイスマンスは典型的に文科系の人である。《さかしま》の略述の章の過去の教育歴をふりかえっての述懐にその片鱗がうかがわれるようにユイスマンスは語学、文学、歴史等を好む。

ジャンが勉学のために送られたイエズス会の学校には、もっと心づくしに満ちた、もっと暖かい生活環境があった。神父たちは、驚くほど利発なこの子供を可愛がりはじめた。しかし彼らの努力をもってしても、規則正しい勉学にジャンを没頭させることはできなかった。ある種の学問には喜んで精を出し、ラテン語などにはきわめて早くから習熟するようになったが、そのかわり、ギリシア語は片言隻語といえども絶対にこれを解することを得ず、生きた言語に対しては、まったく才能を示さなかった。それに、科学の初歩を教え込もうとすると、こうした学問にはまるきり鈍感であることを暴露した⁷⁾。

めざましい科学技術の進歩を背景に爆発的な勢いで伸びていく工業力、そしてそれが引き起こす経済、社会、文化状況はユイスマンスにとって決して歓迎すべきものではなく、むしろ、古き良きそして美しいフランスの伝統的なものを無残に破壊してゆくものであり、工業によって力をつけたアメリカがその軽薄な文化をヨーロッパに浸透させてくる気配、又、全ての人に例外なくとりついてしまったかにみえる拝金主義の風潮はとりわけ我慢な

らないものを感じられたのである。こういうユイスマンスが自然主義文学理論に縛られて書く世界は、ゾラの雄大なそれに比しいかにも卑小さあまりなく、それこそ身辺小説的なものにならざるを得なかったのである。

さて、ルーゴン・マッカール叢書の構想に則って次々と規則正しく作品が生み出されてくるにつれて、ゾラの文学観の本質が次第に明瞭になってきた。その時【ユイスマンスに困惑が生じた。

1880年4月にシャルパンチエから共同の短篇集、*Les Soirées de Médan* が出た頃、ユイスマンスはゾラをせいぜい一足先に世に出た頼もしい先輩ぐらいにしか意識していなかった。それが、ルーゴン・マッカール叢書の進展と共にゾラの文名が強大に成るにつれて、世間はメダンに結集した面々を、あたかも師匠として抜きん出たゾラが率いる影の薄い弟子集団のように見始めていた。事態はまるで、*Les Soirées de Médan* の発行直後、ジャン・リシュパンが *Gil Blas* で皮肉った通りのものとなってしまった。ゾラー人が教皇のように光り、あとの5人はせいぜい裾持ちの追従者でしかない。しかもゾラはユイスマンスを一番弟子であるかのように遇する。

なぜならモーパッサンは、*Les Soirées de Médan* で発表した《脂肪の塊》が認められすっかり人気作家となって独自の道を歩み出していたし、何より彼はフロベールに信服していた。ゾラに終始忠実であったアレクシスやエニックはあまり文才を発揮せず、セアールはゾラの為に資料集めに励むなど公私共にむしろゾラの秘書役に徹していた。それで、自然主義文学理論に忠実で書く力もあるユイスマンスがゾラからも非常に期待されることになったのである⁸⁾。

こうしたゾラからの期待も、ある時期からはユイスマンスには本意かつつらいものとなったにちがいない。それにゾラのような力量を持たぬ場合、この先メダンのグループに留まることがどういう結果につながるかは目に見えていた⁹⁾。

このようにいわば窮地に追い込まれたユイスマンスは苦しまぎれに飛躍を試みたのである。その飛躍の結果が《さかしま》であった。ここで留意すべきは、あらかじめユイスマンスに何らかの成算があったわけではないことである¹⁰⁾。しかし彼岸願望だけは強烈であった。たとえばそれを物語るように、ユイスマンスは Georges Landry への献本に、《*affolé de postulations et d'au-delà*》と書き込んだりしていたという。

《さかしま》は今日、「19世紀末のデカダンスのバイブル」として、つまり文化史的な面で評価を受けているわけであるが、ユイスマンスが意図的に主眼をそこに置いたわけではない。当時ユイスマンスにとって切実な問題は、なんとか自然主義文学の袋小路から脱出したいということであった。従って、《さかしま》執筆当時の彼は、1880年代のフランスの特異な文化状況を仔細に書きとめておくことをねらったわけではない。むしろそれは Christiane Aimery が示唆したように鬱憤晴しの営みから派生したものであった¹¹⁾。

ユイスマンスは苦しんでいた。ゾラの名声の蔭に完全に隠され、おまけに自分本来のものが書けていないという文学上の悩みが晴れず、又一方、生活手段として必要な内務省勤務の下端役人生活が格別面白い筈もなかった。貧しいサラリーマン作家としての彼に現実はいかなる飛躍の試みをも容認する気配はなかった。まさに呪わしい現実、自分を押し潰すだけの現実、しかし自然主義理論に忠実である限りそれから逃れる術はないのだ。それ

から逃れるには今までの発想法を全て逆にすることから始めなければならないのではないだろうか。ユイスマンスのこうした思いが《さかしま》という表題に結晶したのだと筆者には思われる。ちなみに表題は、最初《Seul》であったという。いずれにせよ彼は孤立無援の心境のまま行きあぐねていたのである。

このようにみえてくると、そうした状況からの脱出手段としてユイスマンスが夢と想像力の領域に踏み込まざるを得なかったことは無理からぬことに思われる。ギュスターヴ・モローやオディロン・ルドンの絵は彼に天啓の如く作用し、そうした方向性が決して間違っていないことを力強く肯定してくれたのではないだろうか。従来の行き方とは全く逆に、虚構に立脚すればこそ時代の最先端をゆく羨ましい限りの趣味人、ロベール・ド・モンテスキュー・フザンサック伯爵に化身することも可能なのだ。現実には操れない潤沢な富を想定すればこそ官能的快樂の極限にまで突きすすむことが出来るのだ…

本来は、作品に前置する形で、作品と同時に発表される筈の序文は《さかしま》の場合、作品発表後20年も経過した1903年に書かれた。この事実も《さかしま》という作品の特異さを一面から物語るものである。この事自体に関する説明はユイスマンスの方からもリュシアン・デカーヴの方からも格別示されてはいない。ただ、《さかしま》がその波及効果等を周到に計算し尽した上で冷静に書かれたものでないことだけはこの事実によっても証明されるのではないだろうか。

《さかしま》の序文が発表された1903年の前年には実はゾラが死去している。それはドレフェス事件がらみの謎に満ちた変死であった。すなわち暖炉の煙突が詰まったためのガス中毒死である。後年、何者かの指図で煙突に詰め物をしたという人が名乗り出るなどしたらしいが真相は分らずじまいになったという¹²⁾。

あらゆる階層においてフランスの世論を真二つに分裂させたことで有名なドレフェス事件の際には、ユイスマンスはゾラと対立する陣営の中に居た。実際彼は自ら反ユダヤ的な見解を口にし、人種偏見と無縁の人物ではなかった。筆者にはゾラが死亡した翌年に《さかしま》の序文が書かれたことが単なる偶然だとは考えられない。

おそらくゾラの死に接してユイスマンスの胸中に過去の全てがまざまざと再現したのであろう。就中、ゾラとの葛藤の中で生まれ、又、現在キリスト者としてあることの出発点となった《さかしま》のことが、そしてその執筆当時の苦しみが。

ユイスマンスの文学的営為の出発点の所にゾラが居た。そしてその後、明瞭な形でゾラ路線から離反ただけに、そして年を経る程にますますゾラとは逆の方向に進んだが為に一層ゾラ・コンプレックスは強度を増し、ユイスマンスの脳裡を去らぬものとなったのではないだろうか。「乗り越えたつもりが実は一向に乗り越えていない」、ユイスマンスにとってゾラとはそういう人であり続けたのではないだろうか。

今日、ゾラに対する評価は「単純にして複雑なゾラ」として定着しているようである。実際、1880年代後半に入ってからユイスマンスをはじめ象徴派サイドから盛んに浴せられる激しい攻撃に屈して敗退すると思いきや、ゾラのルーゴン・マッカール叢書の諸作品は人々に愛読され続け、20世紀に入ってから映画人によって何度も映画化されるなど、その根強い生命力を誇っている。そしてそれは単にマラルメが讃辞を措きまなかつた「歴史

以上に面白い歴史¹³⁾」の側面だけでなく、新たに偉大な叙事詩の側面及び神話的要素が研究されるようになっている。更に Henri Mitterand はゾラの《l'œil du peintre》を指摘し、Joy Newton はその文体をファン・ゴッホのあの独特な強烈なタッチになぞらえる等ゾラの新しい魅力が発掘されている昨今である¹⁴⁾。

リュシアン・デカーヴの解説より

さてリュシアン・デカーヴは《さかしま》の解説で次の事実を明らかにしている¹⁵⁾。

Huysmans se trompait, touchant l'accueil réservé à son livre. Le chiffre des tirages, au fond, ne signifie rien. Ceux de Zola et de Goncourt avec *La Joie de vivre* et *Chérie*, laissaient loin derrière eux la vente modeste de Huysmans ; c'est pourtant *A Rebours* qui fut, cette année-là, le plus controversé dans la presse et les milieux littéraires.

リュシアン・デカーヴはここで《さかしま》のはかばかしくない売れ行きが、ユイスマンス自身にも《さかしま》の真価についての判断を誤ませたことを指摘しているのである。しかし《さかしま》は時の経過と共にその真価を発揮し始め、結局その年最も注目され最も人々の論議を呼ぶ作品となったのである。

自然主義文学陣営¹⁶⁾内では、例えばそれがゾラの叱責を買うなど、異物として冷遇ないし問題視された《さかしま》は、別の陣営では意外な好評を博したのであった。それまで狭い仲間内だけでしか知られることのなかったユイスマンスは、《さかしま》によって初めて広い世間の注目を浴びることになった。François Livi が指摘する通り、もし《さかしま》がなければユイスマンスはゾラの蔭に隠れっ放しの存在で終始することになったであろう¹⁷⁾。

ユイスマンスは《さかしま》のおかげですっかり時の人となり、各文芸紙誌は競うようにして当時36才だった彼のポートレイトを掲載したのであった¹⁸⁾。

こうして、やせて背が高く、剛毛のごま塩頭、鋭くそして表情に富む眼等の容貌上の特徴をもつユイスマンスの顔は広く知られるところとなった。「普段は躰のよい猫のように優美で大人しいが、激すれば爪をむき出しにして飛びかかってきますぞ、御用心、御用心」とユイスマンスの親しい友人、Robert Caze は警告を発した。Gustave Gefferoy は、ユイスマンスの柔和に笑っているような特徴のある眼と、彼の魅力的な話しぶりを紹介した。ユイスマンス自身によるその容貌猫写は例えば *En Ménage* の主人公 Cyprien のそれにみられる。すなわち、「背が高くやせこけて青白い顔。うすい髭を生やし指はほっそりと長く先が尖っている。会話中よく手が動き、眼は灰色で刺すように鋭い。頭髪は剛毛ですでに白い。少し猫背で左肩が歪み、全体としていかにも病弱そうで貧し気である」

《さかしま》が引き起した反響の大きさは、この作品について語った批評家の多さからも知られた。ところが彼等の関心は多分に通俗的な事柄に集中する傾向がみられた。ロベール・カーズは《さかしま》について1884年、オピニオン紙の2月10日号に予告記事をのせ、それを《une étude approfondie du pessimisme》として紹介したのであったが、《さかしま》のそうした面は少しも問題にされず、作中にみえる視覚や嗅覚に訴える珍奇な話題

が好まれた。すなわち生きたままその甲羅にエメラルドやルビーを埋め込まれた亀、造花をまねる蘭の花、味覚のシンフォニーや香りのシンフォニー、滯腸で栄養を摂る男等々。そしてとりわけデ・ゼッサントのモデル探しが熱心に行われたという。当初から、ロベール・ド・モンテスキューの名を挙げ得た批評家は少数派に属し、大抵の人は1892年、モンテスキューが *Les Hortensias bleus* を発表するに至ってようやく事の次第に気付いたという。当のモンテスキュー自身は、デ・ゼッサントのモデルになった人として注目を浴びることを喜ぶどころか、むしろ大いに迷惑がったようである¹⁹⁾。

ユイスマンスは枝葉末節のことどもばかりに気をとられていた大部分の批評家は言うに及ばず、デ・ゼッサントにペキュシェの要素を指摘し、ユイスマンスのネオロジスム癖に少しも好意的でなかった Jules Lemaître の批評も冷静かつ冷淡に受けとめただけであった。《さかしま》を語った批評家は多かったとはいえ、ユイスマンスの心に響く批評をしたのは、バルベイ・ドールヴィイ、レオン・プロワ、エヌカンの3人のみであったという。

ドールヴィイの批評の言葉だけは稲妻のように鋭くユイスマンスを刺した。眼光鋭く迫力に満ち、手加減とかまわりくどさとは一切無縁で、その全てが荒鷲をイメージさせるドールヴィイはたちまにして《さかしま》の急所をおそいユイスマンスを唸らせたのであった。

ドールヴィイは、ゾラをリーダー格にする自然主義文学小集団を忌み嫌い、《さかしま》を書くことにより自発的にそこと縁切りし飛び出してきたユイスマンスを大歓迎し、心から援助の手をさし伸べたい気持でいたという。ユイスマンスが12章で展開した宗教関係の哲学者及び作家についての議論を導きの糸として、ドールヴィイは彼の真意を正当に理解することができたのだった。

：《En écrivant la biographie de son héros, il ne fait pas que la confession particulière d'une personnalité dépravée et solitaire, mais, du même coup, il nous écrit la nosographie d'une société putréfiée de matérialisme, et cela uniquement donne à son livre une importance que n'ont pas les autres romans physiologiques de ce temps.》

上記の引用文²⁰⁾にみられるようにドールヴィイは《さかしま》が内包する普遍的性格を正しく見抜いた。

《Après *Les Fleurs du Mal*, il ne vous reste plus, logiquement, que la bouche d'un pistolet ou les pieds de la croix, Baudelaire choisit les pieds de la croix. Mais l'auteur d'*A Rebours* les choisira-t-il ?》

ユイスマンスが心服しているポードレルをひきあいに出してのこの有名な言葉はいたく彼の心の琴線にふれずにはおこななかった²¹⁾。

ドールヴィイはカトリックの大家であるが独特の道徳観を有していた。すなわち彼はキリスト教徒の道徳家であることを自認し、悪魔の存在を信じ、この世におけるその影響の存在を信じていた。彼は純粋な魂の持主達が悪魔の手に落ちないように警告をこめた作品を書くことを自らの使命としていた。ドールヴィイの特徴は、読者に悪魔の手口を余すと

ころなく知らせる為に悪を描写する際少しも手心を加えない点にあった。悪の実相を示し読者に本物の戦慄を喚起してこそ彼の道徳的意図は達成されるのだという信念を彼は有していた。作品に描かれた邪悪極まる場面を実生活の中で再現してみようなどと思う心根の腐った連中は彼は相手にしていなかった。ジャック・ブチは彼の作品を貫くものとして「驚きの美学」を指摘した。ドールヴィイ自身も「カーテンを次々と引き開ける効果」を意識的にねらっていたという。このサーヴィス精神をもって、現実取材した「吹き抜け穴から覗いた地獄」のような情景を垣間見せてくれるというのだから文学愛好者が喜ばないわけはないのである。日本のドールヴィイ愛読者として渋谷龍彦は彼の「主観的語り」を面白がっている。これは多士済々の文学サロンで磨かれたドールヴィイの語り口のうまさか文学作品に反映してのことであろう。実際、彼はド・メーストル夫人のサロンをはじめ各種の文学サロンで、文句なしのダンディ振りと共に語りの妙手という評判で不動の地位をかちえていたのである。

要するにドールヴィイはカトリック作家でありながらその作品は全く説教臭くなかったのである。それがユイスマンスの胸襟を開かせた理由であろう。加うるに、ドールヴィイの少しも包み隠そうとしないゾラへのむきだしの憎悪が、ゾラからの離反を試み、望んでいたユイスマンスにとってははずい分心強い支えとして作用したことであろう。その他、要領よく時流に乗れぬ、純粹であるがゆえの魂の無器用さ加減、独特の女性観など、ドールヴィイとユイスマンスの共通点は少ない。ユイスマンスは《さかしま》でかなりの分量のドールヴィイ論を展開しているが序文によると《さかしま》執筆の頃、両者は互いに全く面識がなかったようである²²⁾。

リュシアン・デカーヴはドールヴィイに関して更に次のように述べている²³⁾。

Si le jugement de Barbey d'Aurevilly ne détermina pas la conversion de Huysmans, on peut dire qu'il lui en ouvrit la perspective.

先述したようにせっぱつまって書かれただけに《さかしま》は、総括と整理の後にうちたてられるべき展望を欠いていた。それゆえ全篇をしめくくる祈り²⁴⁾は行く先も分らぬお先真っ暗な気分の表明にしかっていない。結局、ユイスマンスが探しあぐねていた展望は《さかしま》発表後に外部から与えられたのであった。「欺瞞、汚辱の末世にあって、孤軍奮闘、神の牙城を衛ろうとする戦闘的なカトリック」、バルベイ・ドールヴィイによって。

ちなみにユイスマンスは、ドールヴィイの感化によって熱烈なキリスト者となったレオン・ブロワとも親交を結ぶに至る。そして又、リラダンとも。ドイツ的教養を積み、ショーペンハウアのペシミズム、及びワグナーの汎神論を自家葉籠中のものとしたリラダンはフランス思想界で自信をもって発言し、1880年代後半、その思想的発言によって、それまで絶対的優位を保っていた実証主義的思考法に揺さぶりをかける上で大きな力を発揮したという。又、1885年、すなわちワグナー死没の2年後に創刊された *Revue Wagnérienne* の設立及び運営にあたっては、Edouard Dujardin 等と共に中心的役割を荷っていた²⁵⁾。

《さかしま》発表後、ユイスマンスはゾラの危惧通り、次第に彼と疎遠になり、ドールヴィイ、ブロワ、リラダン、マラルメ、ヴェルレーヌといった人々と親しく行き来するようになる。そして彼等の反実証主義的な思想を自らの思想として全面的に受け入れるようになる。早くも1886年にはユイスマンスはその名を、新生デカダンス派の週刊機関紙、*La*

Décadence の執筆者陣の中に連ね、1891年、《彼方》発表の頃には名実共に彼はゾラとは対立する陣営の人となり果てたのである。

《彼方》の第1章では、デュルタル、デ・ゼルミーの間で交される対話の形式のもとにゾラの自然主義小説が全面的に攻撃され否定されている。そこには、ゾラを「糞ミケランジェロ」、「汚物溜の芸術家」と呼んで揶揄し、時代を愛し、又、時代の子として人気を博し、大衆的支持を得たゾラを徹底的に憎んだドールヴィイの影響が明らかにみとれるのである。

魂の安らぐ場を求めて

《さかしま》を読む者は誰でも、時代の全てに苛立つ病んだ魂がわずかに安らぐ場として修道院がはっきりと想定されていることに否応なく気付かされる。とりわけ老婢に押しつけられる修道女の装束、及びデ・ゼッサントの寝室の内装の描写において。

すっかり人嫌いになってしまったデ・ゼッサントではあるが、身のまわりの世話をしてくれる人手が欲しくて、彼は一組の夫婦を召使いとしてフォントネエの館に住まわせるのであるが、彼はふとした折りに窓越しに見える彼等の姿さえ厭わしがった。そこで彼はとりわけその女房の方に修道女の衣装を着用するよう命じたのであった。

[...]彼は二人と相談して、ある種の呼鈴を案出し、呼鈴の音の数や長短の時間によって、それが何を意味するかを彼らに解らせるようにした。それから会計簿を置く場所を事務机の上ときめて、毎月、自分が眠っている間にそこへ置いて行かせるようにした。要するに、こうして彼は、なるべく召使いと顔を合わせたり話をしたりする必要がなくて済むように、万事を運んだのである。

けれども時折は、老婢が納屋に薪を取りに行くため、彼の部屋の前を通らねばならないこともあった。そんなとき、窓に映った彼女の影によって、気分をこわされてしまっては困るので、彼はこの老婢に、あのゲントの町の修道女たちが今でもかぶっているような白い布帽子と、黒い垂れ頭巾とをかぶらせ、フランドルの節織絹布の衣服を着用させた。そこで、黄昏の薄明りに、こんな冠り物の女が窓の外を通り過ぎるのを見ると、彼はあたかも僧院にいるかのごとき思いをさせられて、活気のある町の一隅に閉ざされ埋もれた、あの声なき敬虔な村々や、あの死せる街々の記憶を新たにするのであった²⁶⁾。

次に寝室であるが、デ・ゼッサントには修道院の小房こそが理想の寝室に思われた。そこは、「孤独と休息の場所、思想の私室、一種の祈祷室」でなければならない。彼は上等づくめの素材を使用し、それでいて仕上がった感じがみすばらしい印象を与える寝室を造りあげることに没頭する。そして目論見通りに出来上がった寝室に彼は苦行僧が用いるであろうような錬鉄製の簡素なベッドを入れ、ナイトテーブルの代わりに古風な祈祷台を置く。部屋の照明としては石油、ガスといった近代照明の類は避け、中世さながらに本物の蜜ろうを原料とした蠟燭を用いるといった念の入れようを見せる。

世捨人が集う、一般に暗いイメージの修道院がユイスマンスの場合、何故こんなにも心の安らぎを招くのであろうか。これには彼の生育環境が密接に影響を及ぼしていると思われる。

ユイスマンスは、朝な夕なに教会の鐘の音の聞える界限に、しかも昔の僧院を改造したアパートに少年期以降住み続けたのであった。慣れ親しんだサン・シュルピス教会の鐘の音への愛着は彼に《彼方》のカレーを描かしめた。カレーはサン・シュルピス教会の浮き

世離れた鐘つき男である。同じく《彼方》のデュルタルが語る次の一節には、教会の鐘に寄せるユイスマンスの愛着の深さがよく表明されている。

「僕のように寺町に住んで、朝から空気が鐘楽の波にふるえているようなところに暮らしていると、病気のときなどは、朝晩の鐘の音が解放の叫びのように待遠しく思われるからね。殊に夜のほのぼのの明けには、こう優しく身体を揺ってもらうような、幼い頃の愛撫につつまれているような、なんともいえない気持ちになるね。ちょうど水のようにさわやかな繻帯をまかれた気持だ。それが丈夫に働いている人たちが、病んでいるもののために、したがって僕のためにも祈ってくれているという確信が湧いてきて、孤独感がうすらぐ思いがしたものだ」²⁷⁾

8才で実父を失くしたユイスマンスは、オッグ氏と再婚した母に伴なわれて10才以降、オッグ氏の住居であったセーヴル街11番地のアパートに住みつくことになった。それは、古くはプレモントレ派教団の僧院であったものをアパートに改造したものであった。建物の内部は昔の僧院の名残りを留めていて廊下や階段はゆったりと広く大きかった。そしてそれは湿気を寄せつけない素晴らしく立派な地下倉を有していたという。普仏戦争に引き続くパリ・コミューンの内乱時には、アパートの住民達はこの地下倉に寝起きし、その時ベッドのシーツが湿らないのを喜んだという。

そのアパートの中庭には、オッグ夫妻が経営する本の仮綴工房があり、その工房の様子は、ユイスマンスの異父姉妹共々、《ヴァータル姉妹》の作中に定着されたのであった。ユイスマンスはこの元僧院のアパートの居心地の良さを愛し、*De Tout* の中で愛着をこめて語っている²⁸⁾。

上記のような理由から、修道院は常にユイスマンスに強いノスタルジーを起こさせたのである。《さかしま》以降²⁹⁾、入信に至るまでユイスマンスの心は相矛盾する二つの願望に引き裂かれたのであった。すなわちこの世における唯一の安住の場として修道院や教会を切望しながら、理性は頑固にキリスト教への入信を拒み続けたのである。

実際、《彼方》の執筆段階でも、彼はできることなら教会（＝信仰）とは無縁でいたいと願っていたのである。彼にはそもそもキリスト者の信仰の基本である三位一体の教義ばかりでなくキリストの神性までもがナンセンスに思われたのである。

彼は聖アウグスチヌスをまねて「虚妄なるがゆえに我これを信ず」の方式でいこうとか、あるいは又、テルトゥリアヌス風に、「超自然が理解しうるならずでそれは超自然ではない。その神聖なる所以は、人間の諸機能を絶するがゆえである」という風に観念しようかとさんざん思い悩むのであるが、現実には「理性の岸边」から一向に飛び立てないでいた。グリュネヴァルトの絵を見て感動を覚えながらも彼はこうつぶやくのだ。「あれ程遠く行くにも及ぶまい。彼岸への口実のもとに、熱狂的なキリスト教におちるのは全く不必要だ。自分に適当な唯一の文学様式である超自然主義を実現させるためにはおそらく霊本主義者となれば足りるであろう³⁰⁾」

又、丸々と肥え太り、心清く貧しい信者達の上にあぐらをかいている、ブルジョワ根性丸出しの実際の聖職者達の姿を見ての反感も強烈であった。更に、神の血と肉を分け与えられるというミサの秘儀にしても、聖油には雉の脂肪が、蠟燭には焼いた骨が混入され、香は俗悪な樹脂と古い安息香から合成され、更に葡萄酒自体不正な混ぜ物で汚され、聖体のパンすらその原料が良質の小麦100%とはいかぬ今日、ミサの有効性など一体どうして信

わたくし掲載された。

5) Colette BECKER, *LES SOIRÉES DE MÉDAN*, Le livre à venir, 1981, P.10

6) (註2)に同じ。P.X,XI

7) ユイスマンス (澁澤龍彦訳)『さかしま』(桃源社, 昭和41年), 4頁

8) (註5)に同じ。

Pendant l'été de 1877, qu'il passe à l'Estaque, Zola échange une correspondance très suivie avec quatre d'entre eux : Alexis, assidu depuis sa venue à Paris en 1869, Céard, Hennique et Huysmans, <fidèles> à ses jeudis (c'est le mot qu'il emploie pour les désigner) depuis 1876. Il ne cesse de les exhorter au travail : <Il faut qu'il travaille, dites-lui bien, écrit-il à Céard au sujet d'Huysmans dans une lettre du 16 juillet 1877. Il est notre espoir, il n'a pas le droit de lâcher son roman, quand tout le groupe a besoin d'œuvres. (...)>

9) (註2)に同じ。P.XI

Nous autres, moins râblés et préoccupés d'un art plus subtil et plus vrai, nous devons nous demander si le naturalisme n'aboutissait pas à une impasse et si nous n'allions pas bientôt nous heurter contre le mur du fond.

10) 同上。

Je cherchais vaguement à m'évader d'un cul-de-sac où je suffoquais, mais je n'avais aucun plan déterminé et *A Rebours*, qui me libéra d'une littérature sans issue, en m'aérant, est un ouvrage parfaitement inconscient, imaginé sans idées préconçues, sans intentions réservées d'avenir, sans rien du tout.

11) Christiane AIMERY, *Huysmans*, CARITAS, 1956 P.40

12) 渡辺一民, 『ドレーフェス事件—政治体験から文学創造への道程』, 筑摩書房, 1972年, P.290

13) 1876年に, その年刊行されたルーゴン・マッカール叢書の第7作品, *Son excellence Eugène Rougon* の献呈を受けたマラルメはゾラに礼状を送り次の諸点に感銘を受けたことを伝えた。すなわち作品が, まさに時代そのものを反映した美学に貫ぬかれている点, その時代に生きた人以外には絶対捕捉不可能な, 生まれる前から消えてゆく類の偶発性に満ちたエピソードをふんだんに盛り込み, いわば歴史よりもっと面白い歴史になり得ている点, スピード感のある文章で, 作者個人の余計な思い入れが感じられずさらりとした味で, 現代人の視線そのものを感じさせる語り口になっている点等である。ちなみに1876年は, ユイスマンスが処女小説, *Marthe, histoire d'une fille* をフランスの検閲をおそれてブリュッセルで刊行した年である。メダンの作家グループはまだ誕生せず, デカダンスの風潮がそろそろ目立ち出す頃のことである。

14) Auguste DEZALAY, *LECTURES DE ZOLA*, Armand Colin, 1973

15) (註2)に同じ。P.341

16) 同上。P.340 (自然主義文学陣営として筆者は下記引用文中に見える *La Revue Indépendante* の執筆者陣を想定する。)

A Rebours ne parut qu'au mois de mai, en même temps qu'une nouvelle Revue dont l'existence a marqué dans l'histoire littéraire de cette époque : *La Revue Indépendante*, fondée par Félix Fénéon, et qui fut ouverte sur l'heure aux anciens tels que Goncourt, Zola, Léon Cladel, Letourneau, théoricien du socialisme, André Lefèvre, philosophe matérialiste, et aux serre-file de la génération montante : Huysmans, Céard, Paul Alexis, Émile Hennequin, Robert Caze, Verlaine, Jean Moréas, Gustave Geffroy, Camille Lemonnier, Haraucourt, Louis Desprez, etc.

Huysmans, outre un article : *La Genèse du Peintre*, dans le premier numéro, et, au deuxième, le compte rendu du Salon de 1884, publia dans les N^{os} 5 et 6, september at octobre, sa nouvelle : *Un Dilemme*.

17) François LIVI j.-k. *huysmans-à rebours et l'esprit décadent* A.G.NIZET, 1972, P.57

Le converti n'a jamais récusé ses premières œuvres naturalistes, mais ce qui compte, dans son œuvre, commence avec *A Rebours*. Dans *Marthe*, dans *En ménage*, il y a bien des traits autobiogra-

- phiques, mais Huysmans était loin d'y<vider son sac> : sans le tournant de 1884, Huysmans aurait peut-être moisi dans un naturalisme d'école, à peine rehaussé par la verdeur et l'étrangeté de sa langue. Avec *A Rebours*, il dénoue les mystérieuses attaches unissant l'autobiographie et la création : il brave<l'honnêteté et toutes les convenances>naturalistes, et il franchit aussi le terrible seuil du ridicule.
- 18) (註15)に同じ。P.342,343
- 19) 同上。P.346,347
- 20) 同上。P.351,352
- 21) 同上。P.352
- 22) (註2)に同じ。P.XXVIII
- 23) (註21)に同じ。
- 24) (Seigneur, prenez pitié du chrétien qui doute, de l'incrédule qui voudrait croire, du forçat de la vie qui s'embarque seul dans la nuit, sous un firmament que n'éclairent plus les consolants fanaux du vieil espoir) .
- 25) Robert L. DELEVOY, *Symbolists and Symbolism*, Geneva, 1978 P.46
- 26) (註7)に同じ。28頁
- 27) ユイスマンス (田辺貞之助訳)『彼方』(桃源社, 昭和41年) 48.49頁
- 28) 1902年, ストック社より初版出る。(諸紙誌に発表したものをとりまとめたもの)
- 29) 田辺貞之助が指摘した通り, 1882年発表の *A Vau-l'eau* にすでに宗教への思いが語られている。フォランタンは、「宗教だけがこのひりひりする傷に繃帯をまくことができるであろうに」とつぶやいていたのである。
- 30) (註27)に同じ。18頁
- 31) (註7)に同じ。314頁
- 32) ユイスマンスがジル・ド・レの研究に熱中したきっかけとしては, まず<さかしま>発表の翌年, 1885年に, E. ボサール僧が著わした『フランス王国元帥ジル・ド・レ』と題する本格的なジル・ド・レの研究書が刊行されたことが考えられる。又, <さかしま>発表の年, 1884年に話題作, <極悪道>を書いて頭角を現わしたジョゼフ・ベラダンが, スタニスラス・ド・ガイタ侯爵と協力してフランスにおけるパラ十字団運動に着手するなど, 世に広くオカルト流行の兆があったことも大きな要因として重視しなければならないであろう。

じられるというのか。厚かましい商人になると小麦粉などは全く使わず馬鈴薯の澱粉で聖体パンを造ってしまうのだ。神はきっと澱粉のなかに降りることは拒否されるだろう。

《さかしま》の第16章にみられるこうしたささいな点に至るまでのユイスマンスのこだわり方は、主として入信をめぐる逡巡する気持ちの表われそのものなのであるが、それと共に、こうしたことに彼の潔癖すぎる程の性格の一端がうかがわれ興味尽きないのである。

《さかしま》の第16章には又、次の一節がある。

それでもやっぱりデ・ゼッサントがある点まで自己の趣味と折れ合うような関係を望み得るのは、聖職者との交際を描いてほかにはなかった。おしなべて学術的で知的水準の高い修道士たちの社会でなら、気の置けないゆったりした気分の幾晩かを過ごすこともできようかと思われた。しかしそのためには、彼自身が進んで彼らの信仰を分かち持たねばならず、少年時代の記憶に支えられて時たま表面に浮かびあがってくる激発的な確信と、懐疑的な思想とのあいだで、ふらふら迷っているわけにはいかなかった。

またそのためには、同じ一つの意見を共にしなければならず、彼が青春時代にとかく陥りがちであったような、アンリ三世時代におけるがごとき魔術の色合をふくんだカトリシズムや、前世紀末におけるがごときサディズムの色合をふくんだカトリシズムは、断乎としてこれを排しなければならなかった。このような特殊な聖職崇拜、芸術的に頽廃した倒錯的な神秘主義に彼は惹かれていたのであるが、こんな考え方は、とても司祭とのあいだで論じ合うわけには行かないはずであった。第一、司祭はこんな考え方を理解することができないだろうし、理解したいにしても、怖ろしいもののように払いのけるであろう³¹⁾。

上記引用文にみられるように、修道院に安らぎの場を見出すためには、「魔術的、あるいはサディズムの色合をふくんだカトリシズム」を排し、「芸術的に頽廃した倒錯的な神秘主義」への関心を断ち切る必要があることをユイスマンスは充分理解していた。しかしながら、その後の歩みをみると、この理性的判断が反古にされ、まさに自らに禁じた邪悪な好奇心に引きずられるままにユイスマンスは「芸術的に頽廃した倒錯的な神秘主義」にのめり込んでいったことが分る。すなわち、彼はジル・ド・レ研究に熱中し³²⁾、《彼方》を書かずにいられたのであった。

ジル・ド・レは、いわば悪魔と手を結んだ中世のデ・ゼッサントとみなすことができ、彼は地上の快樂を果敢に味わい尽そうと試みる。ユイスマンスが、結局のところ神と正面がら向きあうしか道はないのだと観念するのは、《彼方》脱稿後のことでしかなかった。

(平成2年9月14日受理)

註

- 1) 最初この序文は100部のみに限定されて刷られ、特別の愛読者にだけ渡された。この最初のものは Auguste Lepère による多色木版画による挿絵を220含んでいたという。ついで翌1904年、当該序文はベルギーの出版社、Durendal から一般向けに刊行された。1907年のユイスマンス死没以降、ようやく当該序文が作品に前置される形式が定着した。その最初の例が1907年のシャルパンチエ版の新刊、《さかしま》であった。
- 2) ŒUVRES COMPLÈTES DE J.-K. HUYSMANS, tome VII, SLATKINE REPRINTS, GENÈVE, 1972 P.VII
- 3) 同上
- 4) Emile Zola et 《L'Assommoir》；この小論文は1876年、ブリュッセルの新聞、L'Actualité に4回に